

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.047

目次 2020.6

■それ、何に効きますか？

■令和元年度学内版GP成果報告
細尾 佳宏 准教授

■スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

それ、何に効きますか？

成果主義の時代

本ニューズレターNo.43（2019年6月）で、「『3つのポリシーガイドライン』の論理的帰結について」という記事を書きました。概略、こういう内容です。

「3つのポリシーガイドライン」は卒業時の教育成果のマニフェストである「学位授与の方針（DP）」が中心

「3つのポリシーガイドライン」に照らして大学（より正確には個々のカリキュラム）の評価がなされる

- 卒業時の教育成果（＝DPで約束している成果）で大学は評価される
- ← しかし本学ではそれを見越してシラバス・ガイドライン等の設計がなされている

前回は大学全体、より正確にはカリキュラム全体≠学部・学科の中心を中心と書きましたので、今回は個々の授業においてこの「成果主義」がどういう意味を持つのかを書きたいと思います。

本学の戦略は「個々の授業で見える化」

教育の質保証の仕組みは、成果主義の文脈では、カリキュラムの教育成果を保証していくための仕組みということになります。令和元年11月の教育研究評議会で承認された本学の教育の質保証に仕組みは、ひとこと言えば、

DPに結びついた個々の授業の達成目標への到達度＝成績評価で教育成果を測定する
それを授業アンケートの「目標への到達度」の数値で裏書きする

というものです。これは、個々の授業で教育成果をしっかりと見える化していくことでカリキュラム全体の教育成果を保証する、という戦略です。なお、授業の達成目標への到達度で成績評価をするという部分は、本学の「教育課程編成・実施の方針（CP）」で定められているところです。

授業の達成目標に位置づけ

従来から、授業では教育目標がもちろんあり、それはシラバスに明記されていました。しかし、従来では、その授業の目標の扱いについては、それができれば大学での教育は要らないという非常に高尚なものが掲げられている場合も少なくなく、受講生にとって現実の目標とは受け取られていなかったかもしれません。しかし上記の「成績評価で教育成果を測定する」という考え方はそれとは全く違います。「成績評価で教育成果を測定する」という考え方のもとでは、授業は掲げる達成目標を実際に成し遂げられるようデザインされており、成し遂げた学生は「秀」がもらえ、達成目標から見て許容範囲にある学生は「可」をもらえる、というように、達成目標は、学生にとって手が届かなくても許される理想ではなく、成績評価で実際に用いられる尺度として機能するものに変質しています。

薬のアナロジー

体調が悪いと、薬を選んで飲みます。その時、薬を選ぶ際の基準は、値段も考慮するでしょうが、何と言っても「その薬を飲むと何に効くのか」でしょう。成果主義の段階に到達してしまった高等教育の世界では、授業の評価は、「効いたかどうか」、つまり学生から見れば自分が達成目標に到達して「効きめがあったかどうか」が問題になります。また、将来的には、担当教員の評価も、「受講生の何割に実際に効果があったのか」が尺度となることが見えているように思われます。さらに、カリキュラム全体で見ても、「この薬とその薬は、飲む順番はそれでいいのか？」や、「全体的に見てねらった効きめ＝DPが最終的に達成できているのか」が、これは今の段階でもすでに問われています。

個々の授業についても、カリキュラム全体についても、当センターではコンサルを承っております。ぜひお声がけください。効きめが問われる時代です。ご一緒に考えさせてください。

（高等教育研究センター 教授 加藤 鉦三）



令和元年度学内版GP成果報告 vol.1

本号より、令和元年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。

令和元年度は、「受講生の主体的学修を促す工夫」、「受講生の達成感（＝自己効力感、等）を上げる工夫」に該当する教育取組を応募対象とし、今年度のニュースレター（年4回発行予定）でご紹介いたします。

学術研究院農学系 細尾 佳宏 准教授

「森林から建築」ヴィジュアル教材化～受講生の主体的学修にむけて

はじめに

農学部農学生命科学科と工学部建築学科では、平成28年度より学内版GPの採択を受け、協同して「森林から建築」の領域を担う人材養成のための教育に取り組んでいます。この取組は、「木質資源」をキーワードとする講義、演習、実験を学部横断的に実施するシステムを構築し、森林で育てられた樹木が木材として加工され建築物となるまでの総合的な知識を備えた学生を養成することを目標としています。令和元年度の取組では、前年度までの内容を継続して実施するとともに、新たに教育学部技術教育講座教員の助言も受けながら、学生の主体的学修、学修意欲拡大に向けた教材のヴィジュアル化に取り組みました。

取組内容の概要

農学部農学生命科学科と工学部建築学科で科目の相互提供を行い、農学部農学生命科学科の提供科目（森林サイエンス、木材工学演習）を工学部建築学科から延べ16名、工学部建築学科の提供科目（人とすまい、建築環境工学実験）を農学部農学生命科学科から延べ



図1 木材工学演習でのベンチ作成

13名受講しました。受講生からは、授業アンケート等で概ね良好な評価を得ました。以下に、木材工学演習と建築環境工学実験について紹介します。木材工学演習では、農学部附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター演習林で間伐されたヒノキの丸太を用いて、基礎的な木材加工技術を修得するとともに木材の構造と性質について学びました（図1）。成果物として作製したベンチは、工学部C3棟中庭に設置しました。そして、今回の演習では、ヴィジュアル教材として安全上の注意点と主な作業工程について解説した動画を作成し、eALPSでの事前学習用の教材として使用しました（図2）。



図2 木材工学演習の動画教材

受講生は動画を視聴したうえで演習に臨み、休憩時間にスマートフォンで適宜再確認を行いました。これにより、受講生は各作業工程をあらかじめイメージでき、実際の作業を円滑かつ安全に行えるようになりました。

建築環境工学実験は工学部教員が農学部に出向いて行い、木造軸組構造模型の作製を通じて木造

建築物の構造や木材の建築への利用について学びました（図3）。作製した模型は、食と緑の科学資料館ゆりの木に展示しました。また、前年度の授業アンケートの結果を受けて、新たに工学部（加工



技術センター等）の見学を盛り込みました。農学部学生が普段なじみの薄い工学部の教育・研究内容について知る良い機会となり、感想からも有意義な見学であったことが感じられました。

今後に向けて

今回作成した動画教材は受講生から良好な評価を得ましたが、改善点、要望も出されました。出された意見を参考に、ヴィジュアル教材の改善・向上を行うことにより、さらに高い教育効果が期待できます。また、今回得られたノウハウをもとにヴィジュアル教材の作成方法を確立できれば、「森林から建築」以外のテーマにも応用できます。そして、講義、演習、実験の内容を具体的事例と結び付けて学べるような取組を進めることにより、学生の学修効果をさらに高めることができ、森林や建築に関わる様々な課題に対処できる人材の養成につながるものと期待されます。

スタッフからひとこと

大学を卒業し、この春から信州大学の職員として働き始めました。はやく先輩方に追いつけるように精一杯頑張りますので、よろしくお願いいたします。（学務課教務グループ 黒井 悠美子）